


勝林寺寺報

老いて知つたこと

振り返つて見ますと私、随分と生意氣であります。

生半可な知識や子供っぽい経験を振り回して、あちらこちらにぶち当たり、それをまた自分の生き甲斐でもあるかのようにふんぞりかえつて尊大な態度で生きてきたように思います。

お恥ずかしい限りです。

しかし七十も過ぎまた八十歳を越えた今は、自信も誇りも体力も気力も、ちょうど木の枝から木の葉がはらはらと散つて行くように、次々に失われて行きました。いまはもう私にはよるべきなんの自信もありません。社会的にも家庭的にも全くの「役立たず」です。ボロ布みたいになつてヨボヨボ生きているこの姿を本当に悲しく思います。

そう思うと、不思議なことがもう一つあります。

それは、この如来さまの光のなかで出会う人、どんな人も、一人一人それぞれ輝いて出会えるのです。みんなサラサラと輝くように見えます。

これは本当に嬉しいことです。

仕事も、作業も、自然の山や空も、また介護施設で働いている人達も、ことに作業所の人達も……

南無阿弥陀仏をとなうれば

十方無量の諸仏は
百重千重圓通して

よろこびまもりたもうなり

親鸞様もこんな如来莊嚴の世界に住んでいらっしゃったのだろうか。

老いて、ボロボロになつて、生死をさまよい歩くようになつた今、初めて知つた「生きる喜び」であります。

出逢いに感謝！

ここへ「はこべの家」共同作業所での仕事を通じて幾つもの出逢いがあります。本人さん、家族、行政機関の方々、同じ仕事をする仲間など。その中で私自身に大きく影響されたのがボランティアの方たちです。何人ものボランティアさんの出逢い、そのどれもがわたしにとつて宝物です。

葬儀

| | |
|--------|--------|
| 十月十四日 | 下小田 |
| 十月十八日 | 東里 |
| 十月十八日 | 宮下 典子 |
| 十月二十六日 | 野尻 |
| 十一月七日 | 山田 ちえ様 |

木本みつ枝様

八十二歳

葬儀

六十四歳

| | |
|--------|-----------------|
| 十一月一日 | 暮坂報恩講 |
| 十一月二日 | 小田惣講 |
| 十一月三日 | 野尻・矢根報恩講 |
| 十一月四日 | 矢根報恩講 |
| 十一月五日 | 丸中・片間報恩講 |
| 十一月六日 | 口小谷報恩講 |
| 十一月七日 | 豊岡報恩講 |
| 十一月八日 | 百合・桐の・寺坂・日殿・鉢山・ |
| 十一月九日 | みのりを聞く会 |
| 十一月十日 | 山田ちえ様忌明法事 |
| 十一月十一日 | 除夜会 |

賞状 西池希望殿

あなたは書道研究会主催の
第39回公募天全書道展において優秀な成績を認められたのでこれを賞します

平成17年11月27日

大阪府知事 太田房江

十一月 師走

のこよみ

がしかし、何もかも失つて、ヨボヨボ生きているだけの私にも、死を前に慘めな余生を空しく送っている私にも、なにやら今まで全く遙か彼方にあつた世界がワーッと降りかかるようと思えるのです。曙の光か、それとも夕日の茜の空か、そんな輝きがワーッと私の包んできたように感じるのです。

早朝仕事に一キロばかりの道筋を歩いて行くときも、なにかそんな大きな輝きに包まれているように思います。その輝きのなかであう人達もみんなわたしに「行つてらっしゃい」とエールを送つてくださいます。それから一つ一つの、肉体的にはつらい仕事も、この光のなかでは嬉しい励みになつて行きます。こんな仕事をさせていただっこに毎日生き甲斐を感じております。

「如来さまの光りのなかの生死」

そうとしか思えない一日一日です。

米寿を越えてまだまだ自分を磨き続け応援してくれる方。自分のことのように作業所のことを考え心配して下さる設立当初からの何人かの支援者の方々。毎日作業の応援をして職員を含めたみんなからお父さんのように慕われている方。陰になり日なたになって惜しみなく作業所を支えてくださる後援会の会長さん。みんなといるのが本当に楽しそうな笑顔の素敵なおの人……本当に数えだした

| | | |
|------|---------|----------|
| 一日 | 宗学院別科 | 唐川報恩講 |
| 二日 | 眼科検診 | 太田東里報恩講 |
| 三日 | 豊岡教堂報恩講 | 出合報恩講 |
| 四日 | 専福寺法事 | 森戸家忌明法事 |
| 五日 | 奥小谷報恩講 | 山田昭二氏宅法事 |
| 六日 | あすなろ | 連研運営委員会 |
| 七日 | 別科報恩講 | |
| 八日 | 市場報恩講 | |
| 九日 | 宗学院 | |
| 十日 | 小田報恩講 | |
| 十一日 | 田中家法事 | |
| 十二日 | 小田報恩講 | |
| 十三日 | 小田報恩講 | |
| 十四日 | 小田報恩講 | |
| 十五日 | 小田報恩講 | |
| 十六日 | 小田報恩講 | |
| 十七日 | 小田報恩講 | |
| 十八日 | 小田報恩講 | |
| 十九日 | 小田報恩講 | |
| 二十日 | 小田報恩講 | |
| 二十一日 | 小田報恩講 | |
| 二十二日 | 小田報恩講 | |
| 二十三日 | 小田報恩講 | |
| 二十四日 | 小田報恩講 | |
| 二十五日 | 小田報恩講 | |
| 二十六日 | 小田報恩講 | |
| 二十七日 | 小田報恩講 | |
| 二十八日 | 小田報恩講 | |
| 二十九日 | 小田報恩講 | |
| 三十日 | 小田報恩講 | |

ひとつもののち

高校三年男子



僕にとって大事な大事なおじいちゃんが九月の初めに亡くなりました。

口数が少なく、晩年は黙々と畠仕事に精根傾けていましたが、早くから病がちで、病院のお世話にはあまりならなかつたけれど、よく風邪など引いてゴンゴン咳をしておりました。

僕が家のただ一人の男の孫と言うことで、小さいときからとても可愛がつてくれました。

親に反抗して叱られたときにはいつも僕をかばつて、かえつて親をたしなめたりしてくれました。

おじいちゃんは若い時分小学校の校長先生を長くしていたということもあってか、親も「おじいちゃんは都合のいい防波堤でした」とおじいちゃんが九月二日に亡くなつてしましました。

ところが、おじいちゃんが亡くなつて、十日も立たないのに、京都に帰つていったお姉ちゃんに赤ちゃんが産されました。男の子だつたのでおじいちゃんの名前を一字もらつて直弼とつけたそうです。名前を一字もらつただけではなく顔付きもおじいちゃんそっくりと姉が電話で知らして来ました。

血をひいているから似てのは当たり前でしょうが、僕はそのとき、血を引いていようが、いたとい他人であろうが、人のいのちは深いところでみんな繋がっているのではないかと思いました。ひょっとしたら、人間だけでなくあらゆるもの命は、なにか不思議な目には見えないところで繋がっているのではないかと思いました。



平生は、人だ猿だ植物だと外から見える姿かたちで区別しているけれども、目にはみえない深いところではみんな繋がっているのだと思いました。

そんなみな、「同じいのち」の中で出会えたいなと僕は思います。

死んだ人も生きているものとも懐かしく自由に出会うことができるそんなのちを生きたいなと僕は思います。

亡くなつたおじいちゃんとも、いつでも自由に出会える世界があることを僕は憧れます。

いえ確かにあるのだと僕は思います。

靈魂とか幽霊とかそんな気味のわるいこと、ではなく、延び延びとした広ろびろとした、だれもが懐かしく出会える世界。

おじいちゃんはいつか、「生きていても死んでからも、いつでも、だれでも出会えるところがお淨土だそうな」といつて南無阿弥陀

仏を称えていたことを思い出しました。

そんなふうに思うと、亡くなつたおじいちゃんとも、あたらしく生まれ出た直弼ちゃんとも、そのほかの誰とでも、僕は懐かしく出会うことができる南無阿弥陀仏を、これからそつと称えて見ようと思っています。

報恩講ということ

淨土真宗の寺ならどこの寺でも、淨土真宗のご門徒の家ならどこの家庭でも、大概十一月から来年春にかけて「報恩講」という法要をお勤めしないところはありません。

その報恩講と言う法要はどんな意味があるのでしようか。

「恩」に「報いる」「話し合い」というのがその文字があらわす意味です。

では、その「恩」とは何でしようか。

「こころ」すなわちわたしのこの「いのちの原因」。わたしのこのいのちを支えてくれている数限りない条件のことです。

むかしの日本のひとびとはこれを「おかげさま」と言いあらわしました。

お釈迦様は、「どんなものでも、いかなる人でも、目にも見えないほどの無量の支えがあつて初めて存在する。無量の支えなくしては私のこのいのちもありえないのだよ」と教えてくださいました。いわゆる「縁起」の教えです。

しかし、現代の私たちとは、そのほとけさまのおさとしをほとんど上の空、耳をかそうちしません。自分一人の力でくらし自分一人のかいしょで生きているように振るまいがちです。ついつい自分中心の独りよがりの傲慢なものを見方考え方に入れて、人を見下げ軽蔑差別する独善地獄に陥つてしまっています。

ほとけさまは、そのようなわたしへ「ここで一度立ち止まつたて、日ごろのわたしき顧みようではないか。」

「いまこのわたしのいのちに掛けられてる大いなる願い。そのご本願を、亡き父母の

思い出やさまざまの人から戴いた御恩のかずかずをこの縁に、有り難いいまのいのち、もつ

たいない今日の暮らしを、お念仏のなかでお互い話し合いましょう」

これが仏様のお諭し、親鸞様のおすすめの報恩講なのです。

どうぞ、親鸞様のご命日をご縁に、仏法を聴き、眞実のいのちに生きかえる「往生淨土の道」にこそつて参加しようではありませんか。

「ご案内」

鏡餅

みんなの力で
お餅つき!

奮つて参加下さい。

十一月二十一十七日
午後2時より

除夜会の雑煮も

(じやえ)

除夜の鐘つき

雑煮のふるまい

法前で新年のあいさつ

ご家族いっしょにお参りください

一一十一日
十一時一十分開始

勝林寺仏壯
勝林寺仏婦
法輪会

より